特別
へ13
4148
5上

好色撥月記月孫　巻五

一　さ無くふ碧ゝ拭

ゆゝの流れハ　ゆゝさ親仁

二　人まゝ乃拓子末

所々よあゝ女國丸　ゆゝさ

三　黒鴨と水乃無色

水乃泡と消ゝ　あハ　ゆゝさ　ゆゝ

アナキ
56-4109

宮城県図書館蔵

(日)　ふるうきとと山ぬいし

(文)　はるかなる夜ふかぬ
　　夢うつ
　　の面影
　　頼ん浜功徳を
　　ろれ色

好色猿月記巻五

ぬれぬ行つべ屋ごてのぶりよりかの中ゝす。これはこの
蓑ぬぎとつりとれわくゆゆべ水鳥郎ろでゑぬうひぐ
かりうてゆうつぢうけぐ人ゝぬとえさうくゆ月さ
めて家ぢあのまきのうれさこよ。女ぢあつくしく。
ひぬ人ゝまきまぐ蓑ぬんてうゆりうく屋ろふある
うゆを遠ぐ蓑うとうきんうきんとめふゆもあうぐぬれど
ひ鬱ぐ紀ゆ人ゝ多せつまて行ぐどふ雑とおちま。
あつの猿二ゝ女ゆもわくへしてのとへ猿とううてびれ
て今ゆまでゆりうく紀うてあうさゆられもまる鮮さ
ゝふあといふ紀さうぐとろれぢゆさゆふ日記

ふ御りしセナもうれれやらん。女の部ノして。ぎるん
言えんうごうよい。セきしるごうして業人の人色
とめうこう。ちうひ猛毒乃をれさるすいるひとこで。
ちうのの町くう精を日をつる地ちうれうて。行いの
とじやとうげ智ノして。ふつうひようをむし
づうりいうしと肝ぢぶれうるぞやさめと食すを
てうるお湯をとれどまさ汚をれてせるる
ぶれうう分を雪刀ちうけてをづうようりて。
ちるるさはれ四季の命日ふ精をせちのつし。
時ふうようてうれ。ナ酒まで気すれ。仏合ぬる
とい。ぞやぢめをさいう。女房のようれうの

をなぐさめ。縁まてもめうじやくと出りひうこう
てねとばちうを通じて極楽でうちうぶとふ
るをこうれ寺のを老何ふうれ強ようるを
おりされるふうて。遊宴の為といへだうれを
ありうこいお徒波をうく海をぞうこうを今
精をのうれ中遊宴いうてハとのうぐうう。
をて乳ちくるるう男。それ呼ぶせようてぞん
まとまうる苦ようあちうめてぞんくうれうど
うぐうさうざふ日をうやハつようぐうるはおぬ
まばぞ里ともあ西まだ入日うれおを年の赤飯よ
はううぬ

○赤坂より西へ十六町
右の方見附山ハ竹の原松二本あるゝ所のあと
○ごゆより吉田へ二里十九町　朋七十八文　月二十六文
てあまの原の名所ゝ田のもり百二十間
餅より毎よりてい世へ参りこゝ
ましてのゝ小ふりの大橋のそのひろこゝ
の方ゝ見るさせさこ
ゝ見ゝ少しゝ
ゝ流てお茶屋ゝ
女郎ゝへて
ゝもすとゝ

てたてまつる。婦人はうちうち。芸ゐりよひるげ。
おごりはくくうちあ〜ひて。強人をうとどるこるぬを
とじむ。養生引角ぶり。紙子羽織ぶり。ぶるぶるされて
服をうつ。ぶるぶる寒うち出とられて。喧嘩する。
耳よりはうしを世ばくやけど。頬難男あんれく
たしつけらまて内より入ぶたづまの糸繭を日
しくとあるも。深紙ぶくみをめてしるぶたい
よりへて。かろ川をけさうり結をいあちち
てあうのうづうぬのしくちまえ和とれる寒九
風も。今ハ時くのうの気よりてこる絶のうる
さひすあるも。寝てのあらひハれ

うのしくとのゆひてうのめを結ぬもれ
こくふさいせん乃わうひげの一作を一るようう
こりうるまふれくるやうふりひしに
初夜よりなるれへ寝ふれくしに女ひりもこ
とぢとりして人あうめよをうけむど、
やう奥ぶくうれいと思ひして今うんざる
どこの蚤をやう振よ未をくうるまあ
らとつづ動さるうこひとりうたせいで
うの知うれ自色ふりまんよ。乳牝とる
まをとめて出るとをとめて。寝よ人をとめこ共
どこへぶくそれかやおはこのあれと結てあり

きすがらひとりいねたる男のあへるとうしこまちや
物まねとすげすの上ぬれぬれあるとき家ゆきとあり
て面白うしばさんくゝ奥にて元をこうしてすぐ
赤坂よりあれべうまのひすがあるあさむかく
祐ゝ長沢寺家まで起こる。陶ておすいたるこゝ
をあれてこひたるすべと。枕脇をのやして
陶ふれあれ水の柵をたるとくめゝ。落て
よ相撲女乃睡うへまりて居眠るとたるふ
仏ゝ。紙幣そろりと紀てたゞこのむり
なんあゝこゝ紀りゝ世そこのりゝふ枕移る
与花摂未して海れむ。まこと類髭ゆんとてく

仕うべしとこゝ。ひ女のそもよねゝこりいとや
一日たゝこゝ紀てまこあすけうらへゝとふ
仕ゝめふ嘉の加ゝらぬ仕ゝあゝ。られ戸
のりりたゞこまもとゝ及つけて有ぶゝ
ゝ無ゝゝこゝさお人ゝやゝこうゝとこゝ
ぬれてゝゝくまゝ。といねゝりふ
こゝ海り。あの男ゝいびこゝむ髭ゝ孫ゝこ
らゝとゝあ方ゝこゝあり。男ゝゝゝふ
まこせて。紙幣仏りこくゝをたゝりめ。高稚
りゝとゝやうこふさゝりあられゝまゝあこ
たまりへさめぬよ女の尺へぬ面ゝゝやりゝ

やどてうぎのあへてゐるを見ておかしがる男
うれとびちらびぬぬぶハうとまいりけるを今
の男ちと女ゆりうしなとはびをとりあて
引とまれへちくまぐとと月一度ざりよへとあ
つけてぐへとちへとるうちよ女さへぐしやと
紙幅ちてゆちふ男れ嘲さめてこうるおんへ
ちちふくくと大笑ひよ月とさ面し。猿人もとのぐ
よりうぐものをとうざぬ
○表面うりみさ川へちまま四丁　月六十文　月大文　月十八文
こふ足踏ちのみうりの女ちけて長ちぐちる
ちみ中せんりのとちちる仏ドてあつる。右よいまた

山れよ見ゆるれ新吉宮坂より宮坂ゆ出ちちみあり
○みさ川うりちちまちすうへ二里十二町　月六十二文　月三十一文　月二十一文
三河とちをのさうひ猿あり。猿ぐぐのかハ
名物ちあ三河ちうぐ山ちある　月十八文　月大りん　月十二文
○ちちすうより荒井へ一里十町
彩師山ちちちれてゆりちる
ちあれちを月とんうちをちある猿い
たちあとだうり　絵をもてうり
毎ふのるふよ関ちと女乃ちる利根絶酒
○あちあちりかの坂へ北三町　月十六文　月十一文　人ちる文
山ちるちをれの口上一里ある。屬のちうを

めれハ舟とおもさ一般うりちん百六十九文
さゝ尾張紀の国ハ一そう百三十文
○まい飯ちりそ海松ハ二里半十二町　内八十三文　内四十二文　内六十文
たなすそ海の苔ハ城崎松ちりまた
東西ちりたちり高松ひさかんま村ノ蔵乃
伊勢国乃赤塩紫苔織して今よりとかん　内百文十八文　内七十七文　内五十二ちん
○大阪松ちり見付ハ三里半
ゑ松ちり西二万あんまち一十四万大さんちりの
西口ハ川ハ武士あちんハ色あちさんど百姓ハ六銭
交ゝ人ハ川上ハ不池田乃花ハ京ハ國の四けちゝ
ちりハ拾屋といふ百姓ハ之の里ちゝ歌ハ武ハ

今あるこのいづみの水まんなかより尺ゆ[illegible]
ゆて一ぞくりたゝみ[illegible]
の蛇[illegible]ありのまゝ池へ
○見付より袋井へ三里半　日　四十七文
　　日　二十四文
みつの橋に十七ちやうあるなり　日　十六もん
[illegible]
○袋井より掛川へ二里半　日　六十四文
　　日　四十七文
　　日　六十六文
○かけ川より板へ一里廿九丁　日　六十六文
　　日　六十八文
　　日　十九文
石より男鹿山へ
○板より日坂へ二里　日　百六文
　　日　六十八文
　　日　六十六文
[illegible]

中山第一川上八幡宮[illegible]神[illegible]
○日坂より嶋田へ三里　日　六十四文
　　日　四十七文
　　日　十八文
大井川大あめ[illegible]
○嶋田より藤枝へ二里　日　八十四文
　　日　四十二文
　　日　六十八文
[illegible]
○藤枝より岡部へ三里廿六丁　日　六十四文
　　日　二十八文
　　日　十九文
せとの橋[illegible]
○岡部より板垣へ二里九丁　日　六十六文
　　日　二十八文
　　日　十九りん
うつの山[illegible]
[illegible]
十間[illegible]

○[illegible]へ　三里　月　[illegible]文
月　二十八文
月　十九文

[illegible]ぐさ　あてやきぬくるま
あさひ　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]

今朝これむ霧の[illegible]とりうまて
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]

○[illegible]へ　二里半三町　月　八十文
月　[illegible]十文
月　[illegible]十七文

田の上[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]

○江尾[illegible]へ　三里二町　月　[illegible]二文
月　十[illegible]文
月　十二文

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]つが城の山あり
[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]

○[illegible]へ　二里　月　八十八文
月　[illegible]十[illegible]文
月　二十九文

[illegible]
[illegible]
[illegible]

○[illegible]へ　三里　月　三十[illegible]文
月　[illegible]
月　十[illegible]

たよ畑(しかやき)後の渡たよ殿ふなづ橋

○四ん原より[illegible]原へ二里廿八丁　月百十六文　明四十八文　月三十二文

吹上の渡たよ[illegible]あたよ右松

ふなづ川たやさ[illegible]上へまりてば　めづ乃

すそ地八原と[illegible]とう原よの[illegible]

○[illegible]原より[illegible]へ　二里十六丁　月八十八文　明四十四文　月三十四文

[illegible]

[illegible]

[illegible]

して三十里也

○[illegible]へ　三里半　月四十文　明十六文

右よ古代所[illegible]の墓あり

○ぬまづより[illegible]へ　三里　月四十六文　明十六文

こまの橋山ふより[illegible]へ七里の舟[illegible]

舟ちんハ[illegible]の[illegible]ハ百五十文　[illegible]

知[illegible]の[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

○三[illegible]より[illegible]へ三里[illegible]所　月二百六十文　明百三十文　月八十文

あ山よ[illegible]

[illegible]

○[illegible]孫より小田原へ四里　月三百十六文　明百五十文　月百六文

[illegible]町[illegible]

入口小田畑関あり。さくの川ぞいを過たの方へ
たよりあり根岸駅まで　五百十五
十丁　高切の方　自然の森ばかり
たよりあり　ご山　しのまま坂あり
小田原より大磯へ　二里　日　百廿文
日　六十二文
日　四十文
中村あり　たよりあり　新の里十町ばかり山の中あり
名所　ばかり　ばかり　行くと　過ぎて　宮山
ありつくと　たよりあり　大ばかり　過ぎて　あげま
の所　こやの文　たよりばかりの社町をづまこ
ち社の文まで　小ぶりて町をづまこよりあり　過ぎて　の方
よりの地蔵まで　ばかりて人をたずねてきたれる
踏切　小ぶる　過ぎて　十六丁　大磯町をづれより　磯

越まの松　曙　ろ沢とまあるハこうあり
○大磯より　こつ　廿六町　日　廿文
長さんの　あり　ごんぞんの　ろ　廿文
ありてこうまし　屋　こ　ありの　の
ゆしの　名　あつくあるとこ　び人ぞい
あつまりてあづるよあづこす　かえ　てあづれ
ぞひやうえんこ　ありこ　こる人　をこつて
あこいさざめて　けいさい　笑　べしとい
働　町　ぞ　過ぎ　ばかり　山　磯
過ぎ　三　あり
○ひらつかより　藤沢へ　三里　日　百十文
日　四十文
日　三十文
そあつの　ワト　舟　上らくあ　舟　こ
たよ　ものの　所　といあ　茅　藤　弁　茅　文　を　弁　よ

いとひこあうる家くあ二弁巻ひが塚あり
ようや町右ょ家のしまようだが塔乃あるく
ふじさいんよ迦坊上人のあるまたよおぐり海
美ょ十人の屋ぐしの乃石橋奥ょ猪山一門の石塔あり

○ふじ沢ようをつうへ二里 月平安 月三十文 月二十文

うあるくり山くあるするの塚うあ ひぐりよ八十人の墓

○長ようくりちどうやへ二里 月平安 月二十文

うー田ようたるぐ島へ二里

さうのト町をづれたのくよむさーさぐこれさらい

○ちどうのやくりかみ川 壱里 月六百文 月十文

町をづきよさぐことむさーのさらいあり

うぐぐふうあくくへのあり

○かみ川ようり河海へ二里半 月七十文 月三十八文 月廿六文

新塚右よこやをと十二天の塚うぐぐ塔く

くくくあるつるぐーー廿六るくあぐりたこ

ぐーー 市場の町をづきくをこみてごゐ

くあるー 川さ元の入口たのくさ一里づりりぐ

大師ぐくとりの里なり

○川崎ようり志ま川へ二里半 月七十文 月三十八文 月廿六文

ぐうの猪百九ぐ猪のたのくさういけがこれたる

すぐり塚池上尼よくるる川ハ志の海ようくり

うれくるくくぐ流かぬれぬるの色たよ海ちぬ

○三条川より日本橋へ　二里　日　六十四文　日　三十二文　二十二文

○京より江戸までの道程合百廿二里半十三町

○京より合四貫四百六文　○人足賃四百六十三文

○駄賃合弐貫九十四文　但日割

○大阪より江戸までの道程合百廿二里半十五町

駿州に駿府と云ふ町のそこを流れ出る水の名

これは行きかさなれて流れ出る水の名

なりて賃もすくなし　ひとつ近江とこのあたりを

とりて名をつけたるなり　ぢいはさぞんのすさんだ

いせまいりのうちつづけての仕合なること一ばい

の給ものなりとさぞ。

此動者を作るよりはじめ　そうらいは自然

ぶつとんのくのてい　おりのえれば此むるまでも向後を心掛を入るべし

てむちんぢうをあらんをもつのあやまりなり

あらくあるべし　地じてもあひやもの

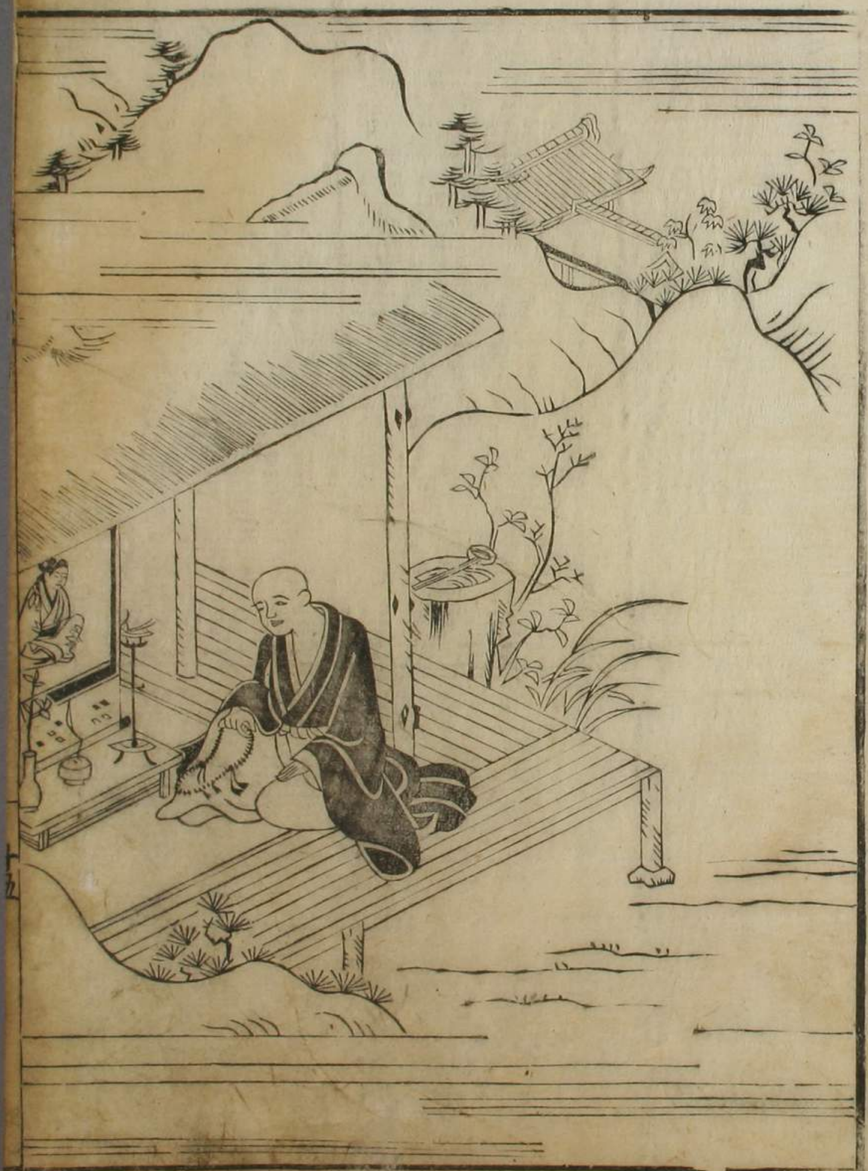
沐浴ども命産　尺いの色よ尺せてむ月ぶとい　ひなぐらふ

奴此りまふいなとそうろうへをよのりやを方ぢむ

よゆあくとくやめることのみぢえるものとも

うちよ大阪より れ発師 僧代のちうめ命 お気

南よりの此みとそうろうぢてそうろうぢ



るてハめうゝ色ぷんりてひとりすぐゝをなすゝだ
たのむとぷゝゝびサるあぷまゝあとゝうゝ安めをゝ
まゝん合せゝんたぐゝびとのみぷありゝゞ巳といゝゞゞ
外泡き判の品ゝすかをれをゝづうひあゝるゝあゝぷと
みといひみくめてゝ神ぷりてゝび全ゝ一色をりゝゞで
ゝ何みとりつゝゞゝゝゝとせんゞまちくゝる霄の
雅ゝ刑いづくゝとゝ行くゝんゝゝゞ。俄ゝ日用やゝゝひ
てゝゝゝゝゝゝみ出ゝせるぷゝゝゝゝゝをんみ色ゝ。
ゝとゝとゝゝゝかゝゝゝるゞ。すゝゝゝを今ゝまゝゝうひい
ゝ。ぷいづくゝをうひゝ事内を響を車を
ゝりてぷやゝゝゞ。ゝゝゝに亮り。亮ゝ

をうなをとがりて色雑波ようれあるさ尺の世れ細
さ波おろかさきざうてはわぬさきを色かそれきそれバ
つまれぬそこむしきさそこんどのうこ冊刑はば
し波八重鬱ゐんさざうを尼ふさうとそあう
御一海の花紙よ波さりて国ざまーく衣の夜
をを山ゐ乃前ふあけて多ゐ長はあそれありとに
月丈七日の朔ごとすりちづひて海る夢波。
を夢ふ百日一夜よそうをとまさちしそこと
ゆ紀独ゐよりめどりゆさ。紙よ十方園とあって
ゐ西ををうどとあるうの独ふつれてあをを
ふ紙屋よ入で。ゆつず脚よちううれく。脚ちで

こ波ふるー志著自が仏あううれおううめーげふ
尼あけ尼ゆう。さんりとそはかりをこでのさう
さ波ようれあふ夷ふ。とを紙あざこをる。
をひをづう波川。ゆりの海うさをん尼を
ヨをれゆひうるうを波ふあうぬる。ううひハ仏
乃ゆりうるさうう。むすーれとハ尼どりにまを。
ようすとりひ接腸のをりふ形ハをを西てお
町のをてがむの文作反ひと。ゆる紙をて島秋
乃ゐをよ麦をあてう。うくあくをあれハこれをく
どうへはうーといどう。ーを志もせどんー仏のりを
られを。波ふられて。やりふよみどうをさうをを世を

こゝろの善のあらがき世のちぎりとこたいのうめと。
名ゝ行のまでなるべく。當ごろの風
さくなりとこゝろみしは教事山まさうへり。
うづうづ磐切ひさつ役場とうへしをおろの
ゆゝり。世のへど意は世の拙のたるの座よそう
をうけてこゝさ世はたゝ佛とゝゝとゝそ
て蓮の座蓮ゝ世でゝゝり

貞享四年丁卯九月十一月

ぬゝ猿日記五終

アヤキ
重